



ランベス・パレスにてカンタベリー大主教
ジャスティン・ウェルビー大主教と

立教英国学院通信

第二六五号 二〇一三年十二月十一日
発行者 立教英国学院

RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND
GUILDFORD ROAD, RUDGWICK RH12 3BE
<http://www.rikkyo.co.uk>

チャプレンより

「灯火をともしこと」

チャプレン 司祭 林 和広

四月から本学院に来て七ヶ月が経ちます。本学院はキリスト教に基づく全人教育の実践を掲げており、そのためにチャプレンと呼ばれる学校付きの牧師が派遣されています。英国にも日本にもキリスト教系の学校が存在していますが、今日の社会においてはキリスト教だけでなく宗教系の学校とは「自らの文化・思想」というものを生徒に学ばせる、狭量な教育をしているところだと指摘する声があります。信仰は強制されないにしても幅広い視野を持たせる機会を失わせている、と言います。

日本の若手神学者の一人である宮平望氏(西南学院大学国際文化学部教授は日本において子供たちの心を疲弊させているものの一つとして日本の受験社会を挙げ

ています。最小時間で最大効果を要求し、知識を詰め込むことだけに集中させ、記憶力の良い生徒が優秀だとされる、そのようなものが本来の教育なのだろうか、と問いかけています。社会においては宗教教育が子供たちの視野を狭め、自由で開放的な学習の機会を奪っているとの見方がある一方で、宮平氏のような見方もあります。実際にはどのようなことが大切なのでしょう。

アイルランドの詩人、ウィリアム・バトラー・イエイツの言葉に「教育はバケツに水を汲むことではなく、心を燃やすこと (Education is not the filling of a bucket, but the lighting of a fire)」というものがありません。単に「しなさい!」と命じて勉強させるのではなく、生徒たちが自分で学び、考える心を養わせるということでしょう。「そんなことは承知している」という声が聞こえてきそうですが、バトラーの言葉は学校で学ぶ生徒だけでなく、生徒たちに関わる全ての人々にも当てはまる言葉でもあるように思います。

慌ただしい競争社会に生きる現代人の最優先事項は、目的達成の為の利益の確保、組織作りです。人間が生きていく意味や心の問題について思索する余裕がありません。しかし、人間にとって大切なことは絶えず自分自身の心を見て、自分の生きる意味を見つけ、様々な問いを持つて考え、困難や問題に向き合っていくことです。子供は大人の背中を見ます。私自身も両親やその他の大人の背中を見て学んできました。しかし、気がつけば自分も父親になり、加えて若い

世代の人々と関わる仕事に従事している...生徒たちから見た自分の背中ほどのようなものであるのだろうか?と考えるとしまいます。若い世代の心を鼓舞させ、火を灯すような背中を見せているのだろうか?と省みる必要があります。

キリスト教の精神は単に教義や道徳を教え込むことではありません。広い視野を持って、学び、考え、成長し続けることができるように「共に」生きることを目指します。日常の中にある食事や交わり、スポーツを通して学んで楽しむと同時に、この世界の様々な文化・慣習・問題に関心を持ち真摯に目を注いで探求することも大事にします。

本学院での七ヶ月の生活の間、勉強だけでなく、大自然に囲まれた敷地に咲くブルベール見学、地域の人々と交わるジャパニーズ・イブニング、球技大会、アウティンク、ウィンブルドンテニス観戦、オープンデイ、コンサート等、自然や文化、スポーツなど様々なものに生徒たちと共に触れて学ぶ機会を与えられています。生徒たちはこうした色々な事柄に触れると同時に、与えられた課題・試験をクリアしなければなりません。一生懸命勉強をして暗記することもあります。けれども単なる暗記で終わるのではなく、自分で考え抜いて理解して自分のものにしていくように教員たちが生徒たちに寄り添う姿も目に見えています。

困難や不安で生徒たちの心の灯火が消えてしまいうような時もあるでしょう。その

ためには生徒たちを支える周りの人々の心にしっかりと灯火が保たれている必要があります。消えかきりそうな灯火に火を分かち合うために。教員と生徒がお互いに学院での生活を通して、学問を通して、この世界とそこに生きる人間について学んでいく、考えていくということを本学院は大切にしているのです。

もうすぐ、クリスマスが訪れます。喜びと希望の灯火の光が世界を照らします。その灯火の恵みが皆様の上に豊かに注がれるようにお祈りしています。



目次

	ページ
チャプレンより	1
2013 OPEN DAY	2~4
Cambridge Science Workshop	5
アウティンク	6~7
Farlington School 訪問	8
アップルデイ	8
部活動の異文化交流	9
(茶道部、バスケットボール部)	
教科レポート	10~11
生徒の活躍	12
コラム	
フライデーケーキ	8

支えられて、支えて

高二―二 岡田 元希

「展示本部がすることって何なんですか？」この言葉を何度生徒から聞いたことだろうか。こう聞く度に、僕はどう返すべきか迷っていた。展示本部としての最後のOPENDAYを迎えるまでは。

二年前、中三の二学期に初めて体験した立教のOPENDAY。日本の文化祭とは違い、一週間丸々授業なしで当日のために準備を行う。クラスで協力しあい、一つの企画を作り上げていく作業はとても新鮮で充実していた。

その一週間を支える為に、何週間も前から準備を行うのが展示本部だった。クラス企画にはほとんど参加せずに、全てをOPENDAYに捧げる。そんな先輩たちに憧れて、高一の春に僕は展示本部に入った。いざ入ってみると、その仕事の多さに驚いた。各クラスの企画用原稿のチェック、申請物の確認、教室の机やイスの移動マニュアル作り、物の貸し出し……。細かいことまで数えあげるときりが無い。そして、それでもこういった一つ一つの仕事がOPENDAYを支えていると思うと、無性に嬉しかった。全てが終わった日には、今までにない達成感を感じた。

あれから一年が経った。三人いた同年の展示本部員は、各々の事情で辞めていき僕は一人となった。お世話になった先輩達もういない。一人でも大丈夫だろうなんて樂觀的に考えていたけれど、現実が甘くなかった。何か問題にぶつかった時、周りに相談できなかった。まだ何も分からない高一にも安易に相談できない。次から次へと仕事が迫ってくる。本当に不安な毎日だった。

夜眠る時、朝が来てほしくないと考えた日もあった。でもそんな時に、高一の後輩が仕事を頑張ってくれて、友達が励まして

くれて、立ち直ることができた。本当は自分が支えなくちゃいけないのに、気づけば周りの皆が自分を支えてくれたのに、おかげで僕はなんとか展示本部の仕事が全うできた。全ての仕事が終わった今、去年とは違う気持ちを僕は味わっている。去年は感じることもなかった疲労感はもちろんだが、それ以上に成功して良かったという喜びと安心が、自分を支えてくれた人達への感謝の気持ちが、胸の中一杯に詰まっていた。

この二年間、僕は色々な人に支えられることで展示本部として活動できた。特にこの一年、そのことを本当に痛感した。目指し憶えてきた先輩達は越せなかったかもしれないけれど、誰かに支えられることで僕は僕なりに学校を支えることができたと思う。だから僕は今、堂々と言ういたい。自分たちを支えている人達をOPENDAYを通して一生懸命に支える。それが展示本部なのだ。



大切な物に気付けた一週間

小六 大石 桜子

「お客さん、来るかな？」そう言いながらすごした、オープンディ期間はとても速くすぎていった気がしました。

今回のオープンディは中一の先輩たちと一緒にやりました。劇やエンターテイメント、そしてチャリティーなどフリープロジェクトの活動もある中、全員で仕上げたクラス企画は最高に良かったです。

今回は中一の先輩二人と私で背景を書きました。最初は美術の時間に書いている感じで書けばいいと思っていたのですが教室の一面サイズの紙面を前にすると

「失敗したらどうしよう。」

と不安になったりしました。しかし、他の先輩も書くのを手伝ってくれたのでその不安は消えてちゃんと背景を書くことができました。

オープンディ期間は授業はありませんでしたが私は授業では学ばないことをこのオープンディ期間中に学んだ事がありました。それはチームワークという物です。ふだんはチームワークという物にはあまり気が付きませんがこのオープンディ期間は全員である一つの自分たちの決めた目標に向かって何かをする事によって、いつもより相手の意見を尊重したり、たまにぶつかって少し、やる気が失せてでもグズグズしていても何も変わらないという気持ちなどがどこからかわいてきます。

そんな気持はこの準備期間中のチームワークという物があるからいつまでも立ち止まらずに進んで素晴らしい企画を作ろうと思えたのだと思いました。

今回のオープンディはいつもは学べないことを学べた貴重な一週間でした。なによりもチームワークという物がどれだけ素晴らしい物かに気付いて良かったです。

2013 OPEN DAY



授業で得られないもの

中三 今田 宇咲

今回のオーブندیは今までの中で一番頑張った。一番楽しかった。だからこそ一番悔しかった。

私達中三は「宇宙」というテーマで今回のオーブندیに臨んだが、このテーマが決まった時、私の頭の中には既に一つの教室の中に宇宙空間が広がっているのが描かれて、なんだかドキドキした。しかし、いざ皆で話し合ったり、調べてみると次々に新しい発見や困難にぶち当たり、改めて宇宙の広さに驚いた。

あつという間に準備期間に入り、本格的に作業が始まった。普段、学級委員を務めさせてもらっているが、準備期間中は背景班としても働いた。私は絵を描くことが正直苦手だ。それに、学級委員なのに話し合いの時うまくまとめられなかった。だからこそ地味な作業でも精一杯頑張ろうと思った。きつとそれなりに責任を感じていたのだと思う。ある時は一時間お手洗いに、もって水のりをつくったこともあったが、全く苦に思うことはなかった。それに今までは失敗することが恐くて、人に頼まれるまでもできなかった自分が、前と比べて自ら仕事ができなせるようになったことがうれしかった。やはり、仕事があるということとは幸せで、自ら探しにいかなくては手にできないということを知った。きつと忙しいというのとは充実しているということなのだろう。

みんなできつくりあげた部屋は想像より良いもので満足した。しかし賞をとるとなるとやはり先輩方のレベルは高く、悔しい思いをした。

きつと来年はもっと良いものが作れると思う。



今回のオーブندیまでの一週間で私は、授業では得られないものを沢山学ぶことができた。まわりのみんなには沢山迷惑をかけたが本当に感謝している。最高のオーブندیだった。

オーブندیで得たもの

高一 石上 直弥

結果から話すと、僕たち高一 一組はオーブندیのクラス企画で何の賞も取ることは出来なかった。確かに他のクラスのレベルは高かったが、高一 二組は総合部門で優勝し、高二も賞をたくさん取っており、高等部で何にも呼ばれなかったのは僕たちだけだった。

悔しさよりも、悲しさよりも、僕の心に湧いた一番の感情は、自分達の作ったものが否定されているような喪失感だった。その後は優勝の喜びを分かちあっている二組の生徒を見て、逃げ出したいくなるような感情を受け、まるで本能的に会話からオーブندیについての話を排除した。

フリープロジェクトは大成し、当日は一年に一度の大事事を心から楽しんだ。しかしクラス企画の失敗により、自分の中で今年のオーブندیに忘れたい過去のようないメージがついた。それはおそらくクラスの皆も感じとつていて、まるでなかったことのようになり、楽しかったね、などと想い出にふけることはなかった。

それから五日後、メールを確認すると珍しく英文のメールが届いていた。前の学校の友人からだった。内容は、実はオーブندیに来ていた、ということだった。当日も姿を見かけなかったもので、僕は非常に驚いた。聞きたいことは山程あったが、長文が苦手な僕は、楽しかった？と軽く返信をした。

た？と軽く返信をした。

やはり日本とは違い、時差が無いので返信が来るのには十分もかからなかった。そして何気なく中身を読んだ。そこには、どの展示も良かったけれど、一番楽しかったのはシンデレラだった、と書かれていた。シンデレラとは僕たちのクラスが取り扱った題材だ。一瞬お世辞かとも思ったが、彼には自分が何組かは伝えていない。それを読んだ時、僕の中にあつた喪失感には消え

去り、見失っていたことに気がついた。

自分は結果だけに取り憑かれていたのだ。その中でオーブندیの主旨を忘れていた。来てくれた人をもてなし、楽しんでもらうこと。少なくとも一人、僕たちのクラス企画で楽しんでもらうことができたのだ。それだけであの展示は失敗なんかではなく、限りなく成功だったのだ。この原点回帰を達成したことこそ、僕がこのオーブندیで得た最も大切なことだったのである。



カーテンコール

高一一 小林 裕季久

オープンデイ当日の夜、ホールの中の生徒達の熱狂とは裏腹に、外は雨だった。でも僕にはその雨が僕らを待っていたように思えた。後夜祭からドミトリーまでの帰り道、びしょ濡れになりながら一人そう考えていた。

中学時代を遊びほうけて過ごした僕は、いつの頃からか“青春”という二文字に憧れていた。辞書には「人生における春」というあいまいな表現しか載っておらず、言葉の意味自体にはあまり深い意味はないだろう。しかし、よく耳にする“青春”という意味を勝手に解釈させてもらって、『何かに熱中して、楽しい学生生活を送ること。』らしい。そう考えると中学時代を無意味に過ごしてしまったのはとても惜しいことをしたと思う。そう思ってもそればかりはどうしようもない。

ならば今の高校生活はどうだろうか、そう自分に問いかけてみた。自分は今、楽しいか。もう一人の自分がいるならば、迷わずにイエスと答えられると思う。

昨年のオープンデイからずっと劇企画に憧れていた。その企画の人々は観る者を魅了していた。この人たちはみな魔法使いで、何か不思議な魔法を使ったのかとさえ疑ってしまうようになった。しかし僕は既に別のフリープロジェクトに所属していたため、劇に参加することはできなかった。オープンデイが終わっても企画の人たちは楽しそうで、お互いを役名で呼び合っているのが、見ていてとても羨ましく思えた。オープンデイが終わった。自分の部活動に勤しんでいた頃、僕のところへ劇をやっていた先輩がやって来てこう言った。「これからつくる演劇部に入らないか」と。僕はこのチャンスを逃すまい、逃してなるものかと思い、「はい」と即答した。

部に入り、練習を始めた。運動部とは全

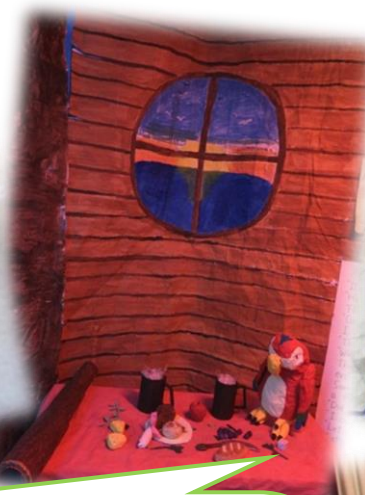


く違った。恥を捨てて大声を出したり、女子ばかり周りにいる中で感情を入れてセリフを読み上げたりするのはとても楽しかった。自分とは違う何かに変身するのは小さい頃からの夢だった。

それから毎日、演劇部が学校生活をしてゆく中で一番の楽しみとなった。幸いなことに演劇部には男子が少なかったため、ずっと憧れていたオープンデイの劇企画にも参加できることとなった。僕は素直に嬉しく思った。

練習を重ね、半年。オープンデイがやって来た。これまでに様々な壁に行き当たった。それを乗り越えて舞台に立った。ラストシーンが終わわり、カーテンコールの時間となった。舞台の上でライトを浴びながら思った。自分はちゃんと“青春”していたんだな、と。でもこれで終わり。オープンデイも、企画も、楽しかった時間も。舞台で一人泣く訳にもいかず、無理に笑顔を作った。

今でもカーテンコールの終わる瞬間を思い出せる。夢から覚めた今、ともに楽しんできた仲間にお礼を言いたい。



本校のオープンデイには、保護者の方々はもちろん、毎年たくさんの人たちが地元の町や村から訪れてくれます。存分にオープンデイを楽しんで頂けたようで、学校にメッセージが届きました。そのうちのひとつを以下にご紹介します。

Hello there, my daughter & I came to the Rikkyo school open day on Sunday & thought it was amazing. The standard of work was really high, my daughter & her friend were amazed as they are at secondary school, they thought your students work was much better than theirs! Everybody was really helpful & polite, we had a lot of fun especially at the bazaar & tea ceremony.

My daughter & her friend knew about the open day as they attend 2nd Broadbridge Heath Girl Guides & some of your students attend there. My daughter said she would love to spend a day at your school.

Regards,



Cambridge Science Workshop

七月一七日～七月二〇日まで本校に宿泊して行われたブレ・ワークショップに引き続いて、七月二一日～二七日までは、ケンブリッジ大学に場所を移して、日英ヤングサイエンティスト・ワークショップが開催されました。ケンブリッ大学研究者の指導の下、日英の同年代の若者達が共同で研究テーマに取り組むというのは、なかなかできない体験です。

初日の午後は、宿泊先の嘉悦ケンブリッジ教育文化センター（マリーエドワード・カレッジ学生寮内）に到着するとすぐ、イギリス側の参加者と初対面しました。外で立ったままフリッシュメント（飲み物など）をとりながら、日本人とイギリス人の高校生達が入り混じり、あちこちで自己紹介が始まりました。中には日本語で挨拶してくれるイギリス人高校生もあり、日本側の参加者達の緊張もほぐれたようです。

二日目は、朝からプロジェクトメンバーの顔合わせがありました。日英の参加者達は、十あるプロジェクトチームのうちの一つに、それぞれ配属されました。立教英国学院の三名は、『Astronomy-Star Wars: What happens when stars collide?』と『Engineering - Wireless Sensor Networks for Infrastructure Monitoring』、『Genetics - Visualising chromosome behavior during cell division using fluorescence microscopy』に入りました。これも最先端の研究テーマです。

その日の午後にはプロジェクトがスタートすると、生徒達はケンブリッジのあちこちにある最新の設備が整った研究室に移動しました。彼らは言語の違いにも怯まず、研究者の説明に熱心に耳を傾け、それぞれの研究テーマに果敢に挑戦し始めました。最終日には、プロジェクトチーム毎に成果をまとめてプレゼンテーションをすることになっていましたから、受け身では居られません。わからないところは積極的に研究者に質問したり、時々ファシリテータにサポートしてもらったりしながら、日英の高校生達が協力して研究に取り組みました。

プロジェクトは朝食後から夕食前まで連日続きましたが、夜は日英の参加者達の友好を深めるべく、様々な交流会が開かれました。プレゼンテーションやスポーツ交流に加え、日本人の生徒達は簡単な日本語の挨拶を教えたり、一緒に折り紙やゲームをしたりしました。書道の企画では、イギリス人の生徒達の名前を漢字の当て字で書いてあげるのが、大変喜ばれたようです。また、イギリス人の生徒達は、自国に関するクイズショーや歌などを披露してくれ、非常に盛り上がりしました。また、ワークショップ終盤のある午後には、ケンブリッ市内を観光する時間もあり、生徒達はしばし難しい研究を離れて、パンティング等を楽しみました。

そしていよいよ、プレゼンテーションの日がやってきました。会場には、プロジェクトの参加者以外にも、スポンサーや研究者等をはじめ多くのゲストの方々が来場され、満員でした。そんな中で、母国語ではない言葉で、外国人のチームメイトと一緒に、サイエンスの最新の研究分野についてのプレゼンテーションをするというのは、全く簡単なことではありません。しかし、引率教員達の心配をよそに、どのプロジェクトチームも素晴らしい発表をしてくれました。生徒達の熱心な探究心と吸収力には本当に感心しました。また、それぞれの発表の後には、質疑応答や意見交換が活発に行われました。この部分は、事前に原稿を用意しておくことができないので、本当に研究内容を理解していないければ、対応できません。日英の高校生達と大人達を前に、堂々と発言する生徒達の姿は、まさにヤングサイエンティストの貫録でした。

充実した時間はあっという間に過ぎ、ケンブリッジを離れる日が来ました。生徒達は将来日本かイギリス、または世界の研究室で再会することを誓って、お別れをしました。イギリスと日本の間には、文化の違いもあれば、言語の壁もあります。しかし、サイエンスという共通の興味の前では、それは越えられないものではないように思いました。これからの世界を担っていくヤングサイエンティスト達にとって、この一週間は、非常に貴重な経験となったことと思います。

アウテイング

二期アウテイング

中一 齊藤 逸成

僕は、二期のアウテイングで、ライムリージスに行きました。ライムリージスは世界遺産のひとつで、ジュラシック海岸の中央あたりに位置する港町です。

ライムリージスの崖から中生代の一億八千万年間に地球に存在した生物の化石が多く発見されています。特にメアリー・アニングという人が見つけた魚竜と首長竜の全身化石は古生物研究に役立ったそうです。



僕は、当然化石を取りに行ったのですが、化石を取るだけではなく、多くのことを学びました。首長竜のプレシオサウルスという生物の化石を取り出した地面はそのままだけなく浜辺にコンクリートを入れてありました。

化石がよく取れる日は雨の日だといします。なぜかという、水にぬれると化石とただの石では色がちがうらしく、わかりやすいようです。ですが僕達が行ったときは晴れてしまい、十個以上を目標に捜したのですが八つぐらいしか見つからず、残念でした。

ライムリージスの町なみは、アンモナイトの電灯や、アンモナイトの看板があったり、アンモナイトをさまざまな所にかいてあったりして、おもしろい町でした。この町はアンモナイトを愛しているように感じられました。

そして、ライムリージスの町には、坂があり、それを上るのに疲れたので家が坂の上にある人は、大変だなと思いました。その坂の上の方を、浜辺から見ると、崖があり、その崖を見ると、色が違い、時代が変わると、違う色の土が積もるのだと改めて感じました。

今回、化石を取りに行くときに案内してくれたガイドさんが言っていたのですが、化石をとる時は、石のどこかにわれやすいようになっている部分があり、そこをたたかずに、ただ適当に力まかせにトンカチでたたくと、アンモナイトがきれいにとれないことがあるそうです。僕は、人生でやらないような体験ができて、しかも、思った以上に楽しく、化石自体は少ししか取れませんでした。いい思い出になりました。

アウテイング

高一―二 竹内 貫太

私は今回のアウテイングで、買い物で店員に英語で話しかけたり、メニューの表記が英語だったり、日本では絶対に見れないような教会や町の建物を見て、改めて自分が日本という国を出て、イギリスという地にいるんだなと思った。

アウテイングという外に出て楽しく買い物をしたり、外食するということだけを考えていて、今まで本当の意味でアウテイングを楽しめていなかったかもしれない。確かに買い物したり、外食したりすることはいいけれど、それはイギリスだからできることではなく、日本でもできるとだ。本当の意味でアウテイングを楽しむというのは、そこで見れない、できないことをして、イギリスという国を少しでも楽しめるということなのかもしれない。

今回私が少しでもイギリスを体験できたと思うことは二つある。まず一つ目はガイドツアーである。ただガイドさんの話を聞いているだけかもしれないが、その話の中に面白いことや知らなかったことがたくさんあるし、ガイドさんが連れて行ってくれるところはケンブリッジでも有名なところであり、その場所のエピソードを聞いたのでとても楽しかった。私はあまり知識がないので、ケンブリッジの地名の由来がテム川であり、橋があるからだと言った時はなるほどと感心した。

二つ目はキングスカレッジの教会で聞いた青少年たちの聖歌だ。まず歌を聞くより先に教会の美しさに驚いた。天井付近のステンドグラスや前に飾られた絵など、とても素晴らしく思った。また少し暗い教会の中の雰囲気は静かでとても落ち着いていた。青少年たちの聖歌は、最初私は立教のクワイアーの人たちが学校で歌っているような感じかと思っていた。しかし、クワイアー



ーの人たちには少し悪いかもしれないが、まったく違った。たくさんいる青少年たちの声が、ごちゃごちゃにならず、しつかりまとまっていて、勿論音もとれていて素晴らしい。歌の意味まではよくわからなかったが、とても心が癒された。

最後にもう一度いうと、私は今までアウテイングの行く意味を勘違いしていたかもしれない。アウテイングはショッピングを楽しむのいいけど、少しでもイギリスという日本ではない国のことを理解するチャンスと思えた。これからアウテイングがあったらそのことを考えて、アウテイングを楽しみたい。

アウテイングで得たもの

高一―二 朝本 和志

このアウテイングは僕にとつてまともな英語の知識を持つて話す初めての外出となりました。そして、普段使っている日本語が無い一時は新鮮さも与えてくれたものでした。

一番英語に触れることができた時間は、ガイドのゴードンさんの話を聴いている時でした。慣れない英語に耳を傾けていた時は、まるでアクション映画を観ている感じでした。「知っている単語が出ないかな」「次はどんなことを話してくれるのかな」と、ドキドキ感とワクワク感が折り重なる感覚は、本当にたまらないものでした。その中で最も印象に残ったのは、ワトソンとクリックの話をしていた時でした。二人が発見したDNAの二重らせん構造は、生物の授業で話に上がったので記憶に新しいものでした。その二人のことを話し始めたので得意げになりながら聴いていると、「二人が二重らせん構造を発見したのはここだよ」と建物指さしながらさらりと云ったのです。イントネーションや言っている全文を聞き取れなかったせいなのかもしれませんが、なにか軽い雰囲気と言っているように聞こえました。その瞬間、遠い歴史の中の人たちのはずなのに親近感が湧いてきました。

他にも印象深かったのは建造物についてのことです。数百年前に建てられたカレッジや教会が今もなおきれいに残っているのは、当時の技術が発達していたということもありますが、やはり陰で清掃活動や維持活動をしてくださっている人たちのおかげだと思えます。一般の人に楽しまれ感動してもらうためには、裏で一生懸命努力しなければならぬ、ということを感じました。この教訓をオープンデイやこれからの人生に生かすことができたらいなと思います。



ここでしか味わえないもの

高三 浅川 水晶

煙が立ち込める舞台上で、赤い旗が大きく振られ揺れていた。

私が観劇した「レ・ミゼラブル」は、一九世紀初頭のフランスを舞台としている。民衆たちは、命をかけて「自由」を追求し闘った。私は革命軍が士気を高め歌っている中、揺れている大きな赤い旗に、彼らの強い「自由」への想いを見た。

帰りのコーチの中で、ふと「自由」について考えた。現代を生きる私も、時に自由を求めている。それは彼らと同様に規則や自分を取り巻く環境から解放されたいという気持ちから生じている。しかし現代社会では、個人が認められ人権が保障されている。一九世紀初頭のフランスではなかったものが、慣習や法などによって承認された上で暮らしている。これは自由の身だと言えないではないか。また、自由の中で自由を求める私は、どんな社会を望むのだろうか。こうして改めて考えると、そこ

には秩序が存在しないと予想できる。そうなれば社会は社会でなくなる。そうなる前に、私は自由への追求に底を作り、現状を大切にしようという姿勢を持つべきだと考える。

舞台上のあの場だけは、一九世紀のフランスであった。当時の民衆たちの魂が役者たちによって受け継がれ、見事に生かされていたのだ。民衆たちの自由への追及が、現代社会を形成する一つの要因となり、こうして未来に生きている私や多くの人々に、自由について問うきっかけをくれたのだろう。

私は「レ・ミゼラブル」に「生きた歴史」を見た。最後の合唱後、思わず立ち上がり拍手をし続けた。あの劇場の一体感は忘れられない。そこには、人種、性別、年齢なんて全く関係なかった。みなそれぞれ胸を熱くしていたにちがいない。

高校生というこの時期に、外国でこのような経験ができたのは、立教英国学院に在籍しているからだ。この学校では、寮生活とはいえ、日本では味わえないような経験がいたるところにあるのだと、今回のアウテイングを通して強く実感できた。私は、約二ヵ月後の終業式まで、もっともつとここでしかできないことを経験しようと思つた。



【2学期の行事】

9月8日 始業礼拝
9月9日 高等部実力テスト
9月17日 全校写真
9月20日 個人写真、卒業学年クラス写真
9月21日 サイエンスワークショップ報告会
9月22日 Farlington School 訪問
9月23日 体力測定
9月26日 午後ブレイク
9月28日 ロンドン日本人学校文化祭 訪問
The Regis School of Music のギターコンサート外出
9月29日 TOEIC、TOEIC Bridge TEST
9月30日 英語・社会科フィールドワーク P5～M1
10月6日 第33回因数分解コンクール
10月9日 アウテイング
10月12日 実用英語技能検定 第一次試験(1・準1級対象)
10月13日 Apple Day 外出
実用英語技能検定 第一次試験(2～4級対象)
10月19日 Guildford Shopping

10月25日 教室移動・ドミトリ移動
10月26日～11月2日 オープンデイ準備
11月3日 オープンデイ
11月4日 オープンデイ片付け、オープンデイ閉会式
11月10日 実用英語技能検定 第二次試験(1～3級)
11月11日 歯科検診
11月16日 Billingshurst Choral Society Concert 外出
11月17日 West Sussex Guitar Festival
11月18日 歯科検診
11月23日 CAMBRIDGE 英検 KET、PET
11月27日～12月2日 期末試験
12月3～4日 答案返却
12月5日 スクールコンサート、中3補習開始
12月6日 ELMBRIDGE VILLAGE でキャロリング
クリスマス礼拝
12月7日 終業礼拝 生徒帰宅
12月14～15日 高等部入学試験 A日程
中学部3年生帰宅

Farlington School 訪問



さらなるレベルへの一步

高一一 鈴木 里紗

「来週の日曜日、ファールリントンスクールのお茶会に行きたい人は？」先生はそう私たちに聞いた。絶対に行きたい。私は他校の外国人の生徒と交流できる機会があると聞いた瞬間から強くそう思っていた。今の自分の英語の力を試したい。自分の性格や日常の態度をどう変えれば文化が違う人達と話せるのか学んで自分を磨きたい。又、自分の限界を知ってステップアップしたい。そういう目標を持ってこのお茶会に臨んだ。

けれどもやはり当日となると、そんな強い意思は泡のように消えていた。情けない

小学生の頃の小さな目立たない内気な女の子に完全に変わっていた。関わるのも面倒くさい、ただのアジア人だと思われたらどうしよう…。自分が、時には泣きながら徹夜までして頑張っていた英語が通じなかったらどうしよう。自分が傷ついたらどうしよう。話す話題がなくなったらどうしよう。そんな不安で胸が一杯だった。そのせいか、私は学校に着いてから一時間は英語をほぼ使わずに日本人の中に守られて身を隠して存在を薄くしていた。

そんな時に、うちの学校の生徒会長が必死に相手の学校の生徒に声をかけようとしている姿を発見した。先輩のカッコいい姿に勇気付けられて内気な女の子を捨ててパワーのある強い子になって、次に目が合ったら笑ってくれる人に話しかけようと決心した。そして見事にクリステルという女の子と良い感じに話を始められた。

長年勉強してきた大好きな英語で自分のことを話したり、高校生らしい話題で盛り上がり上ったり、二時間以上彼女と彼女の友達と途切れることなく話せた。又、大声で皆で笑うことも多かった。気付けば、自分は普通に、考えずに英語を使っていた。楽しくて仕方がなかった。

だが残念ながら楽しい時間は永遠と続くものではなくて、立教に帰る時がやって来てしまった。正直、帰りたくないという気持ちにはめっちゃあつたけれども、仲良くなれた友達からメールアドレスをもらい、また遊ぼうねと言われ、オーブンデイに会う約束をした。嬉しくてたまらな

った。

この日、私は自分の英語にもっと自信を持てるようになり、今まで頑張ってきた本当によかったと思えた。そして、次また彼女達に会う時には、更なるレベルへと一歩進みたいと私は今強く思っている。

アップルデイ

高一一 須田 真央



アップルデイに行ったのは今回が初めてだった。アップルデイとは、リンゴの収穫祭のことで、村にある大きな公園で行われた。収穫祭に行ったことがないので、とても楽しかった。

しかし当日は雨で、その上とても寒かった。だがそれでもアップルデイは行われるということで、また、開催される場所が芝生だったのでグチョグチョだろうなと思った。

会場には、雨にもかかわらず、色々なお店が出ている。お菓子を売っているお店、花を売っているお店、小物を売っているお店などがあつた。リンゴジュースは一つのテントの下で、手動の機械にリンゴを入れて搾っていた。そこで作られたリンゴジュースは、少し酸味がきいていたが、ちょうど良い甘さで美味しかった。私はそこで、ホットドックとリンゴ入りのパンケーキ、カップケーキ、リンゴ入りのケーキなどを食べた。

どれもこれも美味しかった。リンゴの入っていたものは、リンゴの元の甘さを消さずに、リンゴの甘さを残した味だった。日本ではあまり食べられないようなものだった。

今回アップルデイに行つて、貴重な体験が出来たと思う。日本の都会ではもうほとんど収穫祭や、町の人たちが集まっているお祭はないので、英国でこのような体験が出来て良かった。

アップルデイ



フライデイケーキ

「今日フラケの日だぁ」「フライデイケーキ食べに行こうよ」。毎週金曜日に放課後の時間にケーキが用意されます。「フライデイケーキ」です。金曜日の楽しみとして生徒も多くいます。毎週違うケーキが出るので「今日は何かなあ」という楽しみも感じられます。これからも生徒と先生たちの金曜日にすてきな時間を与えてくれるでしょう。



茶道部の活動

「元GCSEの先生たちを迎えて」

立教英国学院の茶道部はとても幸せです。なぜなら、海外という立地なのにも関わらず、お茶室でお稽古ができるから。床の間を見て、水屋で準備をし、襖をあけて畳の上でお点前の稽古をしています。この茶室は数年前に、裏千家ロンドン出張所のご紹介で、ビクトリア&アルバート博物館から譲っていただいたもの。今も大切に使っています。茶道部は、週に最低二回は必ず活動するようにしています。もちろん毎日というわけにはいきませんが、週に一回は初心者向けの活動を、経験者の先輩方が割り稽古から盆略点前まできちんと教えてくれる基礎の活動を、一回は必ず週末のどちらかの日に、顧問の先生と共に稽古をしています。



さて、そんなある日の土曜日。以前、GCSEの物理を教えて下さっていたギンバー先生が茶道を見たい、とお友達を連れて来校されました。ちょうど、五・六月にみっちり割稽古を行った四月の新入部員たちが、九月に入って盆略点前を稽古し、いよいよ実際に湯やお菓子を用意してお点前をしましょう、という土曜日だったのです。十五時ごろから稽古を始めて、ほっと一息ついたとき、お客様がお見えになりました。ちょうど最後の生徒の番。

その番にあたっていた高一の生徒は、一挙に緊張しました。彼女が先輩方に助けられながら、水屋で準備をととのえている間、高二の先輩方が一学期に作った茶道クイズを使ってお客様にリラックスしてもらいました。ちょっとしたお茶の豆知識も、質疑応答もあって、あつという間に和やかになりました。

来校した皆さんの中からお点前のお客様を招いて、初めてのお点前が始まりました。

た。初めてですので、顧問の先生のアドバイスをお願いしながらゆっくり点前を進めます。



異文化交流～茶道部～

まずお菓子を運んでお客様にご挨拶。次に道具を運んで、割稽古で学んだとおりに一つ一つ道具を清めていきます。そしていよいよお茶を点てます。「なかなか泡立たない！」と、言葉には出さないものの焦ります。「もっと大きく縦に振ってごらん。底に茶筌をこすり付けすぎないようにね。」ようやく綺麗なお茶が点てられました。お客様にお茶をおいしく飲んでいただいたあとも、道具をひとつひとつ片付けます。水屋に下がって最後のご挨拶をすると、皆さんから温かい拍手がありがたかったです。「ありがとう、とってもよかったですよ。」「あのクイズは君達の手作り？すばらしいね。」茶

室の教室の外までお見送りして、全員では「お疲れ様。さあ、最後にお茶を点てて飲みましょう。」「やったあ！」

お疲れ様もあるけれど、ちゃんと自分でお茶を点て飲んでみることも練習のひとつ。お菓子やお茶の頂き方もしっかりと復習しました。

「私、初めてだったのに…緊張したあ。」初めての点前で、外からお客様を迎えてお茶を差し上げられたなんて、凄い体験です。きつとずっと先まで覚えているお点前になることでしょう。

バスケットボール部対外試合

初勝利

二学期に入ってから運動部の対外試合が多数行われました。食事後の連絡の時間には各部の部長から試合の予定や結果が報告され、衣食住を共にする仲間の活躍に皆が一喜一憂します。

男女バスケットボール部は男女共に英国のパブリックスクールである BEDES を相手に男子は 38 対 35 で、女子は 53 対 42 で初勝利をしました。キャプテンを中心に声を掛け合い、試合に出る選手、ベンチ、観客が一体となった試合でした。

試合中に相手チームの選手が転ぶと互いに、「大丈夫？」と言い手を差し伸べる姿、試合終了後には「ありがとう」と握手をし、また、それぞれのチームが互いに円をつくり「1・2・3 BEDES」「1・2・3 RIKKYO」と互いに健闘を讃える姿には感心させられます。言葉や文化の壁を越え、相手を思いやり、讃える姿は、正に国際人です。

試合終了後には相手チームと同じテーブルで英語で交流をしながら夕食を楽しみました。「日本人の学生はなぜマスクを

しているの？」「この後も授業があるの！」「何力国語勉強しているの？」と互いの国や学校生活についての会話を弾ませました。

男子は昨年度より地元リーグに所属しており、三学期は同相手とのアウェイでの試合が既に決定しています。また、後日女子チームには嬉しいメールが来ました。「The girls loved to playing you and you are such a nice school, do you want to play next term?」と。女子も一試合が来学期に追加され、男女共に追われる側のチームとして来学期も同チームに臨みます。三学期も男女共に勝利を飾れること、同世代の英国に暮らす学生との貴重な交流の機会となることを願います。



異文化交流～バスケットボール部～

今学期小学生と中学一年生は、Weald and Downland Open Air Museumで社会科の学習を行いました。ここには十七〜十九世紀ごろのカントリーサイドの建物が移築され、ちょっとした村になっています。ひとことで言うと、野外農業博物館、でしょう。建物だけでなく、羊・馬・ロバが飼われていたり、水車小屋の内部では実際に小麦が挽かれていたり、レンガ造りやビクトリア時代の小学校体験など、たくさんのワークショップも開かれています。イギリスの学校でも学習に多く使われる博物館らしく、訪れるたびに見学に来た現地の小学生たちに出会います。

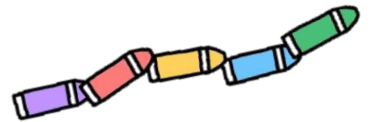
今学期のこの博物館での社会科フィールドワークは「テューダー・クッキング」(TUDOR COOKING)のワークショップと野外博物館の見学の二構成です。

ワークショップでは、テューダー・キッチンと呼ばれる移築された台所で、実際に昔の農家のケーキ作りに挑戦します。五〇〇年前ごろに、一般の人々が食べていたケーキです。始めに様々な穀物を見て学習。博物館のおばさんが、「小麦は手で挽いて細かくするの。大変よ。」「これが挽いた粉。触ってみて。」「小麦粉でパンを焼くの。この頃の食事はパンと、畑でとれた野菜。それから少しの肉。」「ジャガイモやトウモロコシはないのよ。」「えーっ?」「もつと後に南アメリカから伝わったの。」「あつ、この間地理で習ったような気がする。」「

「それから水。川や池で水をくむけれど、牛や羊もジャブジャブ入るのよ。きれいじゃないでしょう?水の代わりに、『ある飲み物』を飲むのよ。何だと思う?」「ビールだ、ビール!」「正解、BEER。」



社会科



教科 レポート

小学生・中一 二学期の社会科フィールドワーク

…と、博物館の方はとっても話上手。

「いよいよクッキング開始。『まずSPICE(香辛料)よ。これをかいでみて、何か当てて。』と次々に材料の香辛料が生徒たちに回りました。シナモンにジンジャー、ナツメグの三種。」「ところで、これから誕生日の人はいる?十月に誕生日の人?」「十月末だけど」と一人の女生徒が。「じゃあ、彼女の誕生日ケーキというのことにしましょう。」「まず小麦粉を入れて。」「と小六の女の子が小麦粉を陶器のうつわに入れてゆきます。次にハチミツを追加。」「当時は砂糖がとっても高価だったのだから甘みにはハチミツを使うのよ。」「次の中一の男の子が卵を割ると、『はい、これで溶いて。』と木の先を七つに割いたような、熊手のような、シンブルな泡立て道具を渡されました。これも当時そのままの道具でしょうか。」「

「今日は水道の綺麗な水を使うわね。」と言いながら、香辛料などと一緒に次々に材料をいれて混ぜ、二つにわけて、それぞれ木の板の上で手で平たく伸ばします。

後ろでは博物館のおじさんが薪に火をおこし、平たい鉄鍋を焼いています。おばさんが伸ばした生地を手際よく鉄鍋に並べます。焼いている間、パンを焼く



釜を見たり、お湯をわかす大鍋を見たりしていると、あつという間にケーキが焼きました。一つのケーキはハチミツをかけて、もう一つはバターをかけて「さあ、召し上がれ。」「あつ、意外においしい。」「私はハチミツのかかった方が好き。」「もう一つちょうだい。」「なかなかの人気でした。」「

ワークショップの前後には、博物館の敷地内を見て回り、豊かな農家のお屋敷を見学しました。二階に備え付けられたトイレが目玉の的。なぜなら下の通りにそのまま落ちるだけ。当時の衛生状況は??恥ずかしい?時代変われば、やり方も異なり、それには理由もついて来ます。面白いポイントのひとつ。さらに、ビクトリア朝の学校も見え、当時の学校のノートが黒板を使った小さな板であったこと(ノートとして書き残せない!)や、日本のそろばんのようなもの(同行のECの先生に、Abacusと言うのよ、と教えてもらいました)を発見しました。

さらにロバをつかってみる井戸を発見。イギリス式の高床式倉庫も発見。ネズミ返し部分は、マッシュルームのような造形物。面白くて不思議です。あちこちでたくさんの興味深いものを見学して、それぞれに学習を深めました。



数学科

因数分解コンクール
〜奥深い数字の世界を楽しみました〜



漢字コンクールに並び、立教にはもう一つコンクールがあります。それは因数分解コンクールです。年に一度、中学三年生から高校三年生までを対象に行われていきます。問題数は一〇〇問。二五問ずつを一区切りにNo.1からNo.4までがあり、次第にレベルが上がっていきます。例えばNo.1は二乗の公式、No.2はたすきがけを主としたもの。またNo.3からは文字のたすきがけや複二次式、No.4は三乗の公式や特殊公式を使って解くものなどの応用問題です。中学生はNo.2まででも悲鳴を上げてしまいます。また、No.4を解き切るとは高校二年生や三年生の理系の生徒でも至難の業です。二期が始まり、徐々に学校生活に慣れ始めた頃、立教生は少しずつ因数分解を勉強し始めます。数学の先生を捕まえて、授業の質問かと思えば、実は因数分解の話であったり、過去問の冊子を個別にもらったりという光景がちらほら見えはじめます。また漢字コンクールではあまり点数をとれなかった生徒も、「数学なら！」と理系根性を見せる者もいます。コンクール一週間前には食事の席でも「勝負しない？」と挑戦を投げかける生徒も。各々に、速報に載ることや、「五〇点以上はとる」「文系には負けない」などの目標を設定していました。

そしていざ本番。高得点への道は、No.2までをいかに点数を落とさずに取ることが出来るかがまず第一歩ですが、そこには数学科のしかけた罠がちりばめられ、思わぬミスをしてしまったりとなかなかの苦

戦。一時間の間、生徒も教員もフルに頭を回転させ、ひたすら因数分解を解きまくりました。

今回の最高得点は高校二年生の二名の九四点、教員の最高点は日本史の先生の九八点でした。このコンクールにより立教生は、今年も奥深い数字の世界を楽しみました。

因数分解に挑戦！！

- (1) $2013x^2 - 2013$
- (2) $x^2 + 5x + 6$
- (3) $x^4 + 6x^2 + 25$
- (4) $x^3 - 53x^2 - 521x + 2013$

※解答は8ページ

英語科



高等部三年生 私立文系コースの生徒達がシェークスピア観劇に外出

高3の私立文系コースではイギリス人による English Project の授業があります。今年度はシェークスピアとその作品について様々な観点から学習を進めてきました。そしてその集大成として、地元の学校の生徒達が演ずるシェークスピア劇を鑑賞。以下 English Project 担当のシャープ先生からレポートです。

* * * *

Shakespeare Schools' Festival

Over the past two terms, the H3 English project class have been studying William Shakespeare, The Globe Theatre and Shakespeare's famous love story, Romeo and Juliet. I am very pleased to report that these students have worked hard and enjoyed learning about this important figure in English literary history. Together we have looked at key facts about Shakespeare's life; the construction of the Globe Theatre, and how it was used during theatrical productions; the contrasts between theatre-going in the early 17th and 21st centuries. I think the students' greatest enjoyment, however, has come from studying Romeo and Juliet, learning about the characters and understanding the main themes of the story.

Having worked so hard on this subject, it was great to hear that this year's Shakespeare Schools' Festival would be held at The Capitol Theatre in Horsham, as this meant our students would have the opportunity to see local English schools performing various Shakespeare plays. On the evening of Wednesday 16th October, Miss Lovegrove (Assistant Head of EC) and I took the students to see a total of 4 plays: Romeo and Juliet, The Tempest, A Midsummer

Night's Dream and The Merry Wives of Windsor. Obviously, these plays were shortened versions and each had its own interpretation, for example, the students performing Romeo and Juliet had cleverly used a football theme and had the Montagues and Capulets as opposing teams; it was great to see our students enjoying this play, understanding the story and recognising the characters. Not all of the performances were so easy to follow; The Tempest, in particular, was difficult and quite a challenge, but it was still an excellent opportunity for our students to experience these plays being performed, and to see that they have shared in an important English educational tradition of celebrating the works of William Shakespeare.

生徒の活躍 フラワーショー

高2—2 太田代 真菜



自分の作品のところを見たら、“**First Prize**”と書かれた紙があった。え。まさか自分が？と一瞬疑いつつも、もう一度その紙を見た。素直に嬉しかった。

私は高1の初め、立教にフラワーアレンジメント部があるのを知って、友達と2人で入部した。フラワーアレンジメントなど、初めてで何も知らないし、特に深い意味があった訳でもなく、ただ“楽しそう”という理由だけで入部した。これがフラワーアレンジメントを始めたキッカケだ。

それからもう一年以上が過ぎた。少しずつさまざまなタイプを苦勞しながらも挑戦してきた。そんな時、今回のショーについて、出てみないかとアレンジメントのインストラクターである先

生から言われ、高2の4人で出ることにした。しかしそう決めたまではよかったのだが、ショーで出す作品は一からデザインを考えなくてはならない。いつもは先生が色や花を決めていたのは初めての試みだったのである。私は考えた結果、“仮面舞踏会”をイメージしたものを作ることにした。私は小さい頃からバレエをやっていて、赤の衣装に扇子や仮面を身につけた踊りを以前にやったことがあり印象に残っていたからである。

当日。前日に前もって作った作品を展示しに行き、その後審査を経て結果を聞きに再度会場に行った。そのとき、“**First Prize**”であることを知った。友達2人も**Second**と**Third**という嬉しい結果だった。

何か物を作って、賞を得たのが初めてだった私にとって、結果を知ったときの喜びや達成感が、スポーツの試合で勝った時のものとは違ったどこか新鮮な気分だった。

フラワーアレンジメント。多分立教に来ていなかったら、やっていなかっただろう。忙しい立教生活の中で、花を活ける時間はいつもと違うひとときを与えてくれる。私はこれからも続けていきたい。



地元オーケストラと共演 生徒の活躍



本校生徒がヴァイオリン協奏曲のソロで、地元オーケストラと共演しました。

11月16日、Billingshurst Choral Society (以下「BCS」と)と Sinfonia of Arun (以下「アラン交響楽団」)の共演コンサートが催され、Bruch (ブルッフ) 作曲『ヴァイオリン協奏曲ト短調』, Brahms (ブラームス) 作曲『ドイツ・レクイエム』, そして Haydon (ハイドン) 作曲『トランペット協奏曲変ホ長調』、三つの曲目が演奏されました。

BCSは、1986年に結成された合唱団です。100名を超えるこの合唱団の活動は大変精力的であり、近年三カ年はトスカーナ(イタリア)、ニューヨーク、ブラハ、パリ、その他海外各地および国内で演奏活動を続けています。

アラン交響楽団は、イングランド南部を代表するオーケストラです。とりわけ、サセックス州においては、様々な合唱団との共演で知られています。

今回、演奏曲目の一つ「ブルッフのヴァイオリン協奏曲」のソリストとして、本校の生徒が選ばれました。昨年の本校創立40周年記念コンサートを聴いたBCSの方から「是非、協奏曲のソリストに」とお招きを頂戴し、実現しました。

また、メインの「ブラームスのレクイエム」には本校芸術科の Mendelssohn 先生も加わりました。コンサート鑑賞を希望する生徒31名が、ミニバス三台に分乗して出掛けました。立教英国学院に深い縁をもたらすコンサートでした。

夕方七時半に始まったプログラムは、途中15分程度の休憩を挟み、夜十時頃まで続きましたが、本校生徒も含め聴衆は皆、スケールの大きな演奏に圧倒され、興奮と驚きに包まれました。



立教英国学院通信の
電子配信への切り替えに
ご協力下さい。

ご意見、ご感想もこちらへどうぞ。

infodept@rikkyo.w-sussex.sch.uk